

論文

ブラジル日本移民をめぐる「先住民と日本人の近縁性」言説に関する一考察

— 第二次世界大戦後のブラジル邦字新聞記事を中心に

長尾直洋 Naohiro NAGAO

名桜大学 MEIO UNIVERSITY

要旨

本研究では、第二次世界大戦後のブラジル日本移民によるブラジルへの適応の一形態としての「先住民と日本人の近縁性」言説に注目し、日系コロニアにおけるその発信と受容、意味づけと機能について論じた。日本移民知識人の香山六郎は、勝ち負け抗争の余波が残っていた 1951 年、『ツビ単語集』の出版及び邦字新聞での関連報道を通して「日本語・トゥピ語同祖論」を唱える事で、ブラジル人種民主主義における白人、黒人、先住民の混交による国民モデルへの日本移民の接近を試みた。本研究では、日系コロニアにおける同言説の社会的影響力を再検討するため、香山論を含めた同言説の存在について、当時のブラジル日本移民の主要言説空間と考えられる邦字新聞、特に負け組側の新聞を主な資料として検討した。具体的には、1947 年から 1953 年にかけての各邦字新聞の記事から同言説を含む先住民描写を抽出し、中庸、肯定的、否定的、肯定的否定的、先住民との近縁性と属性別に分類した後、各属性の先住民描写への分析を行った。分析を通して、当時の日系コロニアにおいて、中庸を含めて先住民への関心が一定程度見られたこと、全体的には否定的属性が肯定的属性を上回るが、香山論と直接関係しないものを含めて日本人との近縁性が複数示唆されていたこと、香山論と同様、そして 1950 年代前半に日系コロニアで大きな関心事となっていた日本からブラジルへの戦後移住との関連で同言説が機能していたことが明らかとなった。

キーワード

ブラジル日本移民史、勝ち負け抗争、香山六郎、エスニック・メディア、ブラジル人種民主主義

目次

- I 研究の背景と分析姿勢
- II ブラジル日本移民をめぐる「先住民と日本人の近縁性」言説の歴史
- III 第二次世界大戦後の邦字新聞における先住民描写への分析
- IV 先住民関連記事の時代別・属性別・地域別分布
- V 結論

I 研究の背景と分析姿勢

ブラジルへの日本人集団移民は 1908 年に開始された。サンパウロ州のコーヒー農園労働力として導入された日本移民は、その後自営農となり主にサンパウロ州内陸部にて日本人集団地を形成していった。また日本移民の一部は都市部でも様々な職種に就いた。日本政府による渡航費補助が開始された 1920 年代半ば以降、ブラジルへの日本移民数は増加していったが、第二次世界大戦前（以下「戦前」と表記）における日本移民の大半は出稼ぎ目的であった。1920 年代以降、北米における排日の動きや日本の軍国主義への懸念から、ブラジルにおいても排日の動きが見られるようになる。1930 年以降はジェトゥリオ・ヴァルガス (Getúlio Vargas) による国家主義政策下で外国移民への制限が強まり、移民子弟への外国語教育や外国語新聞発行が禁止された。1941 年 12 月の日米開戦後、ブラジルは連合国側に立ち、枢軸国出身移民に対して外国語での言論や集会の禁止など様々な制約を課した。日本語情報に依存していた大多数の日本移民は、当時視聴が禁じられていた日本からのラジオ放送で大本営発表を伝え聞くなど、限られた情報下で戦時中を過ごした。1945 年 8 月 14 日（ブラジル時間）、日本敗戦の報がもたらされると、すぐに日本勝利を伝える怪ニュースが日本移民の間に伝わった。日本移民の大多数が日本勝利を信じた（「勝ち組」）一方で、一部の移民指導者層や知識人層は日本敗戦を認識した（「負け組」）。後者から前者へ向けられた日本敗戦認識運動を母国への不敬と取った前者の過激派によって後者の幹部が暗殺されると、両者間に大きな対立関係が生じた。「勝ち負け抗争」と呼ばれたこの動きに対してブラジル社会は大きな懸念を抱き、ブラジル官憲による勝ち組系団体会員の大量検挙や日本移民排斥論の再加熱を招いた。1952 年頃には日本からの移民導入再開の動きが出たが、同抗争による悪影響で、特に日本移民の多いサンパウロ州で強い反対の動きがみられた [日本移民 80 年史編纂委員会編 1991]。

ブラジル日本移民をめぐる「先住民と日本人の近縁性」言説は、1920 年代以降のブラジルにおける排日の動きの際、また第二次世界大戦後（以下「戦後」と表記）における勝ち負け抗争後に確認されている。前者は主に日本移民擁護側のブラジル知識人層によるものであり、優生学と人種を結びつけた日本移民排斥に反対して人種混交を肯定的に捉え、先住民を通した日本人とブラジル人の人種の近縁性について言及した [Lobo 1926; Roquette-Pinto 1933; 前山 2002; Lesser 2006[2002]; 2016[1999]; Takeuchi 2009]。後者は負け組側日本移民知識人層によるものであり、当時のブラジルにおける主流の人種観、すなわち白人、黒人、先住民の混交からなるブラジル人という「ブラジル人種民主主義」[伊藤 2010:47-48] を前提として、先住民との近縁性ゆえに日本移民はブラジルに適合する、という論理で用いられた¹ [細川 2008]。

筆者は拙稿 [長尾 2022] において、後者の日系コロニア²における社会的影響力の再検討を行った。1908 年の第一回笠戸丸移民としてブラジルへ渡った移民知識人の香山六郎は、戦後、祖国日本敗戦をめぐる勝ち負け抗争にて負け組の立場を取った。同抗争による日本移民間のわだかまりが残っていた 1951 年、香山は日本語とブラジル先住民トゥピ族 (Tupi) の言語との近縁性について『ツピ単語集』を通して指摘し、両者の同祖論を唱えた [香山 1951; 細川 2008]。香山の思想に注目した細川周平は、『ツピ単語集』の参考文献を踏まえて、香山がブラジル国民意識の礎となるトゥピ像をよく理解していたと指摘している [細川 2008:249-259]。日本語、トゥピ語、ポルトガル語単語の対訳のみでなく、日本人とトゥピ族の間における容貌の類似と両者の言語の類似の関連づけ、またトゥピ族の牧歌的な「真の連合共同体社会」への肯

¹ 本論の対象期間とは異なるが、日系二世議員の田村幸重は日本移民 50 周年を迎えた 1958 年の連邦議会において、日本移民とブラジル社会とを結びつける意図で、イエズス会を介したキリスト教化など、先住民との共通性について示唆している [Hayashi 2022:12, 16]。

² サンパウロ人文科学研究所創立会員の一人で『ブラジル日本移民八十年史』編纂委員長を務めた脇坂勝則は、ブラジルにおける日本移民及びその子孫によって形成されるコミュニティの名称について、戦前のそれを「邦人社会」、また戦後のそれを「コロニア」と簡潔に定義した [脇坂 1998:66]。「コロニア」の起源はポルトガル語の「colônia」に由来し、日本移民の集団入植地という意味で戦前は用いられたが、終戦直後からは日本移民とその子孫を含む日系共同体を指す用語に転用された [細川 2008:10]。本論では戦前の日系共同体について「邦人社会」、また戦後のそれについては「コロニア」ないしは「日系コロニア」という表現を用いる [長尾 2022]。

定的描写などが盛り込まれた『ツピ単語集』について、香山は詩的情緒とユーモア気分によって、コロニアの人々の心を和やかにするために出版したと同書の中で述べている [香山 1951:5; 細川 2008:261-262]。細川は同書を通して香山が『『詩的』情緒と『ユーモア気分』によって緊張を緩和し、民族集団を統合するための呼びかけ』を行ったと指摘した [細川 2008:262]。また、細川は香山論について、勝ち負け抗争でブラジル国内にて肩身の狭い思いをしていた日本移民が「起源においては日本人だが、ブラジル社会の一員であることを両立させる起死回生の神話」 [細川 2008:261] であり、「ブラジルの正式な国民のメンバーとは見なされていない日本人が、実はヨーロッパ人よりも先に住む部族の兄弟であるという政治的含み」 [細川 2008:x] を持つものであったと説明している。

先行研究は香山論へ関心を示しつつも、その社会的影響力をほとんど評価していない [細川 2008:288]。これに対して、拙稿では当時ブラジルで発行されていた邦字新聞における香山論関連の記事を収集、分析することで、当時の日系コロニアにおける同論の社会的影響力の再評価を行った。香山論を直接、間接に扱った諸記事を通して、『ツピ単語集』のコロニア及び日本での頒布状況、邦字新聞を通じた香山論の発信とコロニアにおける政治的言説としての認識、ブラジル社会への影響の可能性について確認することで、主に負け組側言論空間における同論の一定の社会的影響力について示唆した [長尾 2022]。

先に触れたように、「先住民と日本人の近縁性」言説は香山独自の発想ではなく、戦前よりブラジル知識人層によっても発信されていた。筆者は香山論の検証を行った際、当時の邦字新聞において香山論とは直接関係しない先住民関連記事を複数確認している。香山論において確認された、戦後の日系コロニアによるブラジルへの適応の一形態としての同言説は、香山以外の日系コロニアからも発信そして受容されていたのか。日系コロニアにおける同言説の発信と受容に関する検討は、ブラジル日本移民史、特に日系コロニアによる戦後のブラジル社会への接近についての新たな事例を提供することとなる³。

本論では、香山論を含めた「先住民と日本人の近縁性」言説との関連に注目しつつ、日系コロニアにおける先住民描写を分析することで、当時の日系コロニアにおける先住民描写の持つ機能を論じていく。その際、ブラジルで発行された邦字新聞を日系コロニアにおける主要な言説空間として捉え、同言説空間における先住民関連記事への質的分析を行っていく⁴。

II ブラジル日本移民をめぐる「先住民と日本人の近縁性」言説の歴史

ブラジルにおいて「先住民と日本人の近縁性」言説が表舞台に登場したのは、アジア系移民としての日本移民の有用性が議論された 1920 年代であった。1923 年にはミナスジェライス州選出下院議員フィデリス・レイス (Fidelis Reis) によって外国移民制限法案が上程され、排日の動きが顕在化する。1925 年、ブラジル中央農会は全国知識人層へ向けて、移民導入に関する国家政策の在り方についての大規模アンケートを行った。アンケート結果からは、他人種への評価と共に日本移民への肯定的・否定的評価が多数見られた。日本移民への評価のうち、肯定的なもののいくつかにおいて、先住民との近縁性をその論拠とするものがあつた。ただし、本アンケートを分析した前山隆は、先住民との近縁性を示した意見はあくまで少数であったとしている [前山 2002]。

先のアンケートと同様に、1920 年代から 1930 年代にかけて、日本移民を擁護するブラジル知識人層からしばしば同言説が発せられた。例えば連邦下院議員のオリヴェイラ・ボテーリョ (Oliveira Botelho) は

³ ブラジル以外の地域で、先住民と日本移民の関係性について検討した論考としては、物部ひろみによるハワイ日本移民の先住民観に関する研究が挙げられる [物部 2010]。

⁴ 本論における「言説」の定義は「特定の時代に特定の人々が特定の話題に関して表現した内容」 [鈴木 2006:205] であり、「単にテキストを分析するだけでなく、それを産出し受容した社会的コンテクストや、言説が与えた社会的影響」、「考えや概念・分類などといった内容面に加えて、それらが作られた文脈や発せられた相手」 [野村 2017:251-252] を踏まえて考察を行う。

先住民の起源がモンゴル人にあるとして、先住民とポルトガル人の混交がバンデイランテ (bandeirante)⁵ という好ましい結果をもたらしたのであれば、なぜ日本人とブラジル人の混交を否定するのかと主張した。またリオ医学校教授で日本からの医学留学生をよく援助したブルーノ・ロボ (Bruno Lobo) や当時の著名な人類学者エドガール・ロケッテ=ピント (Edgar Roquette-Pinto) は、先住民を通じたブラジル人と日本人の人種的類似性を指摘する事で、黄禍論による排日姿勢を批判している [Lobo 1926; Roquette-Pinto 1933; Lesser 2006[2002]; 2016[1999]; Takeuchi 2009]。

ブラジル日本移民側も、同言説を認識そして受容する素地を持っていた。1920年代における主要邦字新聞の一つである『伯刺西爾時報』の1925年7月17日付第1面には、先に挙げたボテリョがレイス法案へ反対した際の意見書の内容が紹介されている。同記事によれば、ボテリョは日本移民の有用性を並べた上で、文筆家で政治家のアルフレッド・エリス・ジュニオール (Alfredo Ellis Júnior) によるブラジル人の血には日本人の血も混じっているという説を援用して「日本人が我国土人の先祖の一であるとしたら、吾人は此有益な国民の渡来に便宜を与えなければならない⁶」と、先住民と日本人の近縁性に基づいた日本移民擁護論を展開している [伯刺西爾時報 1925年7月17日405号1面]。また、先述のロボの著作は当時の邦字新聞内で繰り返し宣伝されており、周囲のブラジル人へ日本移民について正しく理解させるための贈り物としての利用が勧められていた [伯刺西爾時報 1926年8月13日461号7面]。ブラジル知識人層によって発信された同言説は、その著作や邦字新聞を通して日本移民へも伝わっていたといえる。

1920年代、日本国内では南米先住民、特にインカ帝国への関心が高まり、インカ帝国は日本人が建国したという説が流布した [橋本 2019:349]。こうした流れの中で、例えば当時の人気冒険小説『豹の眼』(1928年) ではインカ帝国の末裔を母に持つ少年が白人圧政に苦しむ有色人種の王国を再興するといった物語が展開されている [橋本 2015; 2019:368-370]。インカを同じアジア人とする土壌は、当時の東洋史学の大家も学説として認めていた [橋本 2015:104; 2019:356-359]。家族移民を主としたブラジルへの日本移民の最盛期は、渡航費を日本国が補助した1920年代中頃から1930年代前半であった。当時の少年層は戦後には壮年世代となっており、日系コロニアの主要な担い手となっていたと考えられる。日本、もしくはブラジルにおいて、当時の日本移民少年層が、物語を通して南米先住民と日本人の近縁性について間接的に受容した可能性を示す事ができよう⁷。

さらに、戦前の邦字新聞において、ブラジル人種民主主義への意識を読者層に向けさせるような記事が確認できる。香山によって創刊された『聖州新報』には時折先住民関連の記事が掲載された。例えば1934年、日本移民制限が盛り込まれた二分制限法⁸が採択されてまもなく、ブラジル人種民主主義の源流に連なる作品の作者ジョゼ・デ・アレンカール (José de Alencar) による『グアラニー族』の邦訳が連載されている⁹ [聖州新報 1934年7月17日876号4面]。また、戦前の日本移民知識人層である安藤全八は、ブラジル国民創成におけるブラジル側の先住民への注目について記事にて紹介を行っている [聖州新報 1936年11月17日1166号4面; 細川 2008:297]。

先に挙げた寄稿者の安藤を含めて、同時代の日本移民、特に知識人層を中心に、先住民への学術的な関

⁵ 植民地時代、サンパウロを拠点に金の探査や先住民奴隷狩りを行った人々で、混血が多かった。独立後のブラジルでは、奥地探検によって国土を拡大した勇敢な英雄と見なされている [Lesser 2016[1999]:161]。

⁶ 本論で扱う新聞記事には一部差別的表現が含まれているものもあるが、それらについては書き手の人種観を示すものとして当時の用語のまま記載している。なお、引用文における旧字体や旧仮名遣いについては、新字体と新仮名遣いに改めた。

⁷ 同時代において、日本の新聞雑誌を取り次ぐ書店はサンパウロ州内のサンパウロ市やリンス市で確認されている [日伯新聞 1927年9月9日540号5面; 同10月7日544号2面]。なお、『豹の眼』が掲載された少年冒険小説雑誌は、1930年代にはブラジルでも流通が確認されている [伯刺西爾時報 1934年9月19日1019号4面]。

⁸ 1934年憲法に含まれた移民制限条文であり、各国からの毎年の入国可能人数を過去50年間に国内に定着した当該国人総数の2%と定めた [日本移民80年史編纂委員会編 1991]。

⁹ 本作品は、『聖州新報』のリオ通信員であり、ブラジルの政治情勢について数々の記事を執筆した椎野豊 (筆名は丘の人) によって翻訳された [半田 1949:325; 久保平 2022]。

心が確認されている。例えば 1930 年代初頭には神屋信一¹⁰によって、天文、気象、植物そして考古学を研究する栗原自然科学研究所が創設され、先住民の貝塚発掘等が行われた。また 1936 年には考古学を愛好するサンパウロ州内の日本移民らによって「ブラジル・インディオ文化研究同好会¹¹」が組織されている。当時のサンパウロ総領事であった市毛孝三を初代会長とした同会は、1937 年に日本よりブラジルへ調査のため訪れた考古学者で人類学者の鳥居龍蔵による指導の下、貝塚を発掘している¹²。その調査結果は『ブラジル・サンパウロ州内の考古学的調査』として 1939 年に東京人類学会より発行された [ブラジル・インディオ文化研究同好会 1939; 酒井 1979]。『伯刺西爾時報』は「鳥居博士歓迎」と題した社説にて、鳥居の来訪とその考古学研究について以下の期待を述べている。

奈何せん我々は色の上に骨格の上に欧羅巴民族と異なる所多いが故に排斥の憂目に会うのみならず、伯国を白人種の専有かの如く振舞われ何にかに付け不利と不快を感ずる場合、鳥居博士の今回のけん究に依り若し伯国の原始民族が我々東洋民族と関係があり、共通点の有るという事でも明らかになるならば、我々は此の事実の上に伯国と因縁の深かきを感じ、発展上更に勇気を増すものである [伯刺西爾時報 1937 年 5 月 10 日 1332 号 2 面]。

この描写から、当時の日本移民による考古学的な関心の一つに先住民と東洋民族との近縁性の証明があり、日本移民を擁護するブラジル知識人層が唱えたものと同様、その証明によって日本移民のブラジルにおける存在の正当性が認められるであろうという考えがうかがえる。また、1940 年にはサンパウロ州内陸部のリンスにて先住民の貝塚が発見されたが、同貝塚の発掘を任された神屋はその調査報告にて先住民に関する講話を行い、その中で「インディオは蒙古族で、我々に最も近い」とその近縁性をほのめかしている [伯刺西爾時報 1940 年 11 月 5 日 2326 号 3 面]。

III 第二次世界大戦後の邦字新聞における先住民描写への分析

前章にて、戦前におけるブラジル知識人層による「先住民と日本人の近縁性」言説の発信と日本移民への伝達、日本における同言説の展開とブラジル日本移民への影響、日本移民へ向けられたブラジル人種民主主義関連記事の存在、そして日本移民知識人層による先住民への学術的関心と考古学的アプローチによる同言説の発信が確認された。本章はこれらを踏まえて、戦後の邦字新聞にて先住民がどのような存在として捉えられていたのかを検討する。なお、本論では香山論との関連で負け組側の言論空間を主な調査対象とする。

III-1 調査資料

本論では、戦後にサンパウロ市にて発行された主要な邦字新聞のうち、負け組側の読者層を擁した『パウリスタ新聞』、『日伯毎日新聞』、『バストス週報』、そして勝ち負けを明確に示さず双方の読者層を有した『サンパウロ新聞』を対象とする（以下、引用部分はそれぞれ「パウリスタ」、「日伯」、「バストス」、「サンパウロ」と表記）。調査範囲は、各新聞の創刊から、敗戦後の日本の状況が戦後移住者によって生の声と

¹⁰ 1893 年生まれ、兵庫県神戸市出身。幼時に台湾へ渡り、台湾や中国での生活後、永住目的で大正 15 年にブラジルへと移民した。サンパウロ州奥地の開拓中、先住民の遺物を発見したことで関心を抱き、栗原自然科学研究所を創設した [神屋 1957]。

¹¹ ポルトガル語名は「Sociedade Arqueologica Brasileira de Amadores」 [酒井 1979] であり、当時の邦字新聞上では「考古学研究会」 [日伯新聞 1937 年 1 月 7 日 1091 号 7 面] や「ブラジル土着人文化研究会」 [伯刺西爾時報 1938 年 12 月 3 日 1754 号 3 面] などと呼ばれていた。

¹² 同発掘調査に参加した栗原自然科学研究所の酒井喜重は、出身地である北海道にて地名にアイヌ語が用いられていたことから先住民への関心を抱いたという。酒井はブラジル移民後、同地にて地名のみでなく動植物名に至るまで先住民語が用いられていることに北海道との類似を感じ、ブラジルでの先住民研究を志している [酒井 1979:7]。

してコロニアへ多数届くようになる 1953 年前半期までとした。以下、各紙の属性を確認する。

『パウリスタ新聞』は 1947 年 1 月創刊で、負け組側の機関紙として認識運動を行った。創刊当初、コロニア内における勝ち組の勢力は依然として強く、部数を伸ばすのに苦戦した。創刊当時の発行部数は約 4,500 部とされる [深沢 2010:124-128]。本論では、ニッケイ新聞社所蔵の 1947 年 1 月から 1953 年 6 月までの新聞原紙、1 号から 1208 号までを調査対象とした。

『日伯毎日新聞』は『パウリスタ新聞』から分離した一派により、1949 年 1 月に創刊された負け組側の新聞である。創刊当時の発行部数は定かではなく、10 年目で 2,000 部から 3,000 部を発行していたという [深沢 2010:131-134]。本論では、ブラジル日本移民史料館所蔵の 1949 年 1 月から 1953 年 6 月までのマイクロフィルム、1 号から 1218 号までを調査対象とした。

『バストス週報』は 1950 年 1 月ごろ、サンパウロ州内陸のバストスにてバストス自治会によって創刊された。最終号 (1978 年 12 月) までガリ版刷りで出版され、発行部数は数百部を超えることはなかったとされる。同地域内の出来事に多くの紙面が割かれており、負け組側の立場を取っていたと考えられている [国際日本文化研究センターHP]。本論では、国際日本文化研究センターHP 掲載の 1951 年 8 月から 1953 年 6 月までのデジタルデータ、80 号から 170 号までを調査対象とした。

『サンパウロ新聞』は 1946 年 10 月創刊で、勝ち負けに触れない天皇帰一論をかざすことで勝ち組負け組双方を読者層とし、徐々に日本敗戦事情を広める戦略で部数を伸ばした。創刊当時の発行部数は約 1 万部と言われている [深沢 2010:121-124]。本論では、サンパウロ新聞社所蔵の 1950 年 1 月から 1953 年 6 月までの新聞原紙、298 号から 757 号までを調査対象としたが、1951 年 1 月、11 月、12 月分の所蔵はなく、また同年 2 月は 17 日付分のみ確認できた¹³。

Ⅲ-2 先住民描写の内訳

資料調査の結果、対象の邦字新聞 4 紙から、総計 67 の先住民関連記事を抽出した。各新聞の内訳は、『パウリスタ新聞』が 25 記事、『日伯毎日新聞』が 37 記事、『バストス週報』が 2 記事、『サンパウロ新聞』が 3 記事となっている。これらのうち、拙稿 [長尾 2022] で扱った香山論と直接関連する記事は 12 記事 (『パウリスタ新聞』7 記事、『日伯毎日新聞』4 記事、『サンパウロ新聞』1 記事) であった。以下では、香山論とは直接関連しない各記事における先住民描写について、偏った解釈がなされないものを「中庸」、好ましい存在として捉えるものを「肯定的」、好ましくない存在として捉えるものを「否定的」、肯定的描写と否定的描写が共になされているものを「肯定的否定的」、先住民と日本人の近縁性について言及したものを「先住民と日本人の近縁性」としてそれぞれ分析を行う。

Ⅲ-3 中庸描写

描写内に先住民への偏った解釈がなされていないものは全体で 19 記事、新聞別では『パウリスタ新聞』が 6 記事、『日伯毎日新聞』が 13 記事であった。『日伯毎日新聞』では 1952 年から 1953 年にかけて、先住民研究家の高橋麟太郎¹⁴による「麻州横断三千軒…先住民族の跡を尋ねて…¹⁵」と題された連載記事が複数回掲載されており、その第 1 回には「ブラジル先住民を尋ねながら将来の移植民について研究もしたい」と本調査旅行の目的が示されている [日伯 1952 年 8 月 28 日 1001 号 2 面]。本記事及び連載記事のいくつかにおいては先住民への評価がみられなかった [日伯 1952 年 9 月 9 日 1011 号 4 面; 同 9 月 12 日 1014 号 4 面; 同 9 月 13 日 1015 号 4 面; 同 9 月 23 日 1023 号 4 面; 同 9 月 24 日 1024 号 4 面]。

先住民研究関連記事について、先住民研究で有名な日系二世の翁長薫のサンパウロ大学社会学部校友会

¹³ 各紙共に欠号や紙面の破損が時折みられたことを付記しておく。

¹⁴ 記事の筆名は「高橋かむろ生」である。『日伯毎日新聞』の連載記事の 2 か月ほど前に、『パウリスタ新聞』において同氏のマトグロッソ調査行が告知されており、本記事は同調査行を反映したものとみられる [パウリスタ 1952 年 7 月 11 日 957 号 3 面]。

¹⁵ 「麻州」はマトグロッソ州、「軒」はキロメートルを指す。

会長への選出 [パウリスタ 1948 年 11 月 11 日 225 号 5 面]、植物学者の橋本梧郎を中心とした日本移民の博物学愛好家らによるマトグロッソ州クイアバにおける先住民関連の遺跡発掘 [日伯 1951 年 9 月 16 日 749 号 3 面]、高橋が招待され、安藤、橋本、そして香山が加わり、サンパウロ市内で開催された「インヂオを語る会」について [日伯 1951 年 9 月 18 日 750 号 3 面]、橋本が設立したサンパウロ博物研究会による前述の発表会の傍聴記事 [日伯 1951 年 9 月 20 日 752 号 3 面]、翁長によるゴイアス州調査行の紹介 [日伯 1951 年 12 月 18 日 821 号 3 面]、ブラジルにおける農村の衛生状態や人類学、そして先住民語の研究を目的とした医学博士の天野景康の来訪について [日伯 1952 年 5 月 17 日 927 号 3 面]、サンパウロ州アラサツバの高橋宅にて開かれた、日本人牧師によるマトグロッソ州先住民教化に関する座談会 [パウリスタ 1952 年 6 月 26 日 945 号 3 面]、高橋のマトグロッソ州への先住民調査旅行予定の紹介 [パウリスタ 1952 年 7 月 11 日 957 号 3 面]、「ブラジルの先住民インヂオの生態」と題された『パウリスタ新聞』における高橋による連載記事の一部にてマトグロッソ州のボロロ族 (Bororo) の婚姻制度について触れた記事 [パウリスタ 1952 年 7 月 30 日 973 号 4 面]、後にサンパウロ大学で教鞭を執る斎藤広志によって『パウリスタ』新聞紙上にて連載された「アマゾン通信」における先住民語の紹介 [パウリスタ 1953 年 3 月 18 日 1143 号 2 面] といった諸記事においても、描写内に先住民への評価はみられなかった。

その他、日本移民柔道家のあだ名として先住民部族名が用いられたもの [日伯 1952 年 11 月 7 日 1061 号 3 面]、インカ帝国時代の壺について触れた記事 [日伯 1952 年 12 月 2 日 1081 号 4 面]、シャバンテ族 (Xavante) をテーマとした映画関連 [パウリスタ 1953 年 2 月 10 日 1117 号 3 面] についても描写内に先住民への評価はみられなかった。

各描写内には、先住民への評価はないものの、先住民研究家の高橋による先住民探訪の長期連載記事、また先住民研究関連の記事が多数存在していた。これらの諸記事の存在は、『パウリスタ新聞』や『日伯毎日新聞』といった負け組側の言説空間における先住民への一定の関心を示しているといえる。

III-4 肯定的描写

描写内に先住民への肯定的評価がみられたものは全体で 4 記事、新聞別では『パウリスタ新聞』が 2 記事、『日伯毎日新聞』が 1 記事、『バストス週報』が 1 記事であった。『パウリスタ新聞』では新刊紹介にて娯楽雑誌掲載の「シャバンテス土人の話」を興味あふれる記事として紹介しており [パウリスタ 1948 年 10 月 28 日 220 号 5 面]、またブラジル国内ニュースの中で「インヂオ友の会」による「インヂオ週間」開催と、先住民手芸展覧会や先住民関連研究会の実施を告知している [パウリスタ 1949 年 3 月 12 日 272 号 2 面]。

『バストス週報』では、ブラジルにおける日本語習得、特に文字の重要性を論じた「日本語を学ぶ子弟へ」という記事の冒頭で、文字のない国語が減んだ一例として「インカ語」を挙げているが、インカ帝国について「文化を誇り繁栄し、立派なインカ語を持っていた」と肯定的な描写がなされている [バストス 1951 年 9 月 23 日 85 号 4 面]。

『日伯毎日新聞』における高橋の連載記事では、マトグロッソ州へ先住民族の跡を訪ねる際、先住民の自然性への肯定的評価を行っている。

身長豊かなボトキーナ族、馬乗りの達人グアイクルース族、より原始的土人とされているナンビクアーラ族が、あの山間のそこ、かしこに千年、万年の昔のままの原始生活を今なおつづけているのである、昔の姿、昔の人に憧れ、悠久にして変らぬもの、平和なるものを求めて此处までやって来た私は、何となしに心の踊るのをどうすることも出来ない [日伯 1952 年 8 月 29 日 1002 号 4 面]。

先住民への肯定的描写について、主に先住民研究家の高橋の見解として昔から変わらぬ平和さ、自然性が示されており、拙稿 [長尾 2022] で確認した香山論に通じる、先住民の自然性への肯定的解釈が確認できる。また、インカ帝国の文化への肯定的評価がみられた。

Ⅲ-5 否定的描写

描写内に先住民への否定的評価がみられたものは全体で 12 記事、新聞別では『パウリスタ新聞』が 3 記事、『日伯毎日新聞』が 9 記事であった。これらのうちの 5 記事では、パラ州のトカンチンス川流域のシャバンテ族、カネラ族 (Canela) その他先住民による鉄道襲撃 [パウリスタ 1949 年 7 月 7 日 317 号 2 面]、マトグロッソ州へ向かう邦人探検隊に触れた記事における「シャバンテ族のような獰猛な土人」描写 [日伯 1951 年 8 月 11 日 720 号 3 面]、マトグロッソ州南部にて邦人農家が先住民の襲撃を受けたとの報道 [日伯 1952 年 10 月 4 日 1033 号 3 面]、同報道の内容を現地在住者が否定するも、先住民の襲撃という文言を再度掲載することになった記事 [日伯 1952 年 10 月 18 日 1045 号 3 面]、イナゴによる被害について、イナゴを御馳走とする「蛮族シャヴァンテス」という描写 [日伯 1953 年 5 月 27 日 1197 号 3 面] といったように、先住民、特にシャバンテ族を名指しにして、野蛮、獰猛なイメージが付与されている。

パラ州とマトグロッソ州を流れるシンゲー川上流に住むカマユラ族 (Kamaiurá) の少年によるリオデジャネイロ見物に関する記事では裸体の未開人描写がみられた [パウリスタ 1951 年 12 月 1 日 792 号 2 面]。また、日本の政治に関連したコラムでは「日本人が『土人のような』原始民族であるとは思わぬけれども…」 [日伯 1952 年 10 月 22 日 1048 号 4 面] と先住民の原始性が否定的に用いられている。さらに、当時ブラジル国内で話題となっていた、ブラジル人探検家男性とマトグロッソ州の先住民女性との結婚について、男性が衣服を用意しても「蛮地」へ戻ると「元の裸」に戻り、「足も洗わぬ」ので別れ話が持ち上がっていると描写している [日伯 1953 年 5 月 26 日 1196 号 3 面; Cunha 1976:13]。

戦後の沖縄からの集団移住先として知られているマトグロッソ州のカッペン移住地¹⁶の先発隊について紹介した記事では、同地について「人くい人種が住むとまでいわれる」と表現している [日伯 1953 年 1 月 20 日 1108 号 3 面]。また、日本史における海外への日本人奴隷の送り出しを踏まえて、アマゾン地域へ導入されたばかりの日本人戦後移住者の行く末を案じた記事¹⁷の中では、16 世紀のポルトガルへ輸入された奴隷として先住民が挙げられている [日伯 1953 年 2 月 20 日 1133 号 4 面]。

マトグロッソ州のパラグアイ国境に集住する日本移民について触れた記事では、邦人社会と三十年間も隔離され、「土着人」に交わって生活したため、生活様式まで「土人化」、結婚相手も「土人」、話す言葉もポルトガル語ではない「土語」であるといった説明をし、以下のコメントを載せている。

土人化した邦人二十数家族の日々の営みをみて邦人視察者は邦人移民の将来を考えさせられ暗い気持ちに襲われるという [日伯 1950 年 8 月 31 日 458 号 3 面]。

この記事からは、先住民との接近が描かれるも、その論調は移民史家の半田知雄などが触れているカボクロ (caboclo) 言説に近いものとなっている¹⁸ [半田 1970:489-493]。同様の描写は、当時ブラジル調査を行っていた日本の文化人類学者の泉靖一についての記事でも確認できる。アマゾン流域の日本移民について、泉は調査を踏まえて以下のようにコメントしている。

あちらの人々の一番敏感に神経を使っていることは子供の教育で、付近に住むインジオの影響を受けて文化的に低下しないように高度の教育を受けさせアマゾン地方でも上流の社会に出て恥じないよ

¹⁶ 沖縄からの移住が実際になされたのは 1958 年からである [長嶺 1990]。

¹⁷ 本記事の寄稿者であるアンドウ (前述の安藤のこと。戦後はカタカナ表記を記名とした) が在籍していた日伯新聞社の社主である三浦肇など、移民知識人層の一部は戦前より日本移民のアマゾン地域導入に対して慎重論を唱えていた [古杉 2021:243]。日本人戦後移住の候補地としてアマゾン地域が挙げられた際、憂慮を示したアンドウらとアマゾン移住推進論者たちとの間で対立が生じている。ブラジルの愛国者団体を巻き込んだ騒動の結果、アンドウらは告発されブラジル官憲の取り調べを受けたが、最終的に告発は取り下げられ、不起訴処分となった [長尾 2019:28-31; 古杉 2021:231-249]。

¹⁸ 「カボクロ」という用語には様々な定義があるが、ブラジル日本移民の場合、教育もなく土地を持たない農村労働者で、常に否定的なイメージを伴う言葉として使用された [森 2003:102]。

うに努めている¹⁹ [パウリスタ 1953年3月18日1143号3面]。

以上の先住民描写から、シャバンテ族に代表される獰猛性、全般的な原始性、食人、奴隷、またカボクロ言説を彷彿とさせる、日本移民へ悪影響与える存在といった諸要素を確認できた。

III-6 肯定的否定的描写

描写内に肯定的否定的双方の評価が確認できたものは全体で5記事、新聞別では『パウリスタ新聞』が1記事、『日伯毎日新聞』が4記事となった。パラナ州ロンドリーナの南部を流れるタクワラ河畔で先住民と出会った日本移民の話では、秤の目が読めないで売買時に文明人にごまかされてしまうといった否定的描写がありつつも、「只一本の山刀で千古の大原始林を縦横に活躍し、たくましく生きて行く」とその自然性への肯定的描写がなされている [パウリスタ 1950年1月28日400号3面]。

米誌『クリスチャン・サイエンス・モニター』記事の紹介では、リオデジャネイロからアマゾナス州のマナウスまで7年探索を行った探検隊のエピソードが掲載されており、アマゾン川支流域において「ねい猛な原始土人と悪戦苦闘する探検隊」、「日食に脅える土人達」、「野蛮なインディアン」、「百五十年も昔から白人に対して宣戦を布告しているインディアンシャヴァンテ族」によるブラジル政府の先住民保護使節虐殺、と否定的描写がなされるも、探検隊によって懐柔され、シャバンテ族らが白人に対して温和な態度を示すようになる、といった描写も併記されている [日伯 1951年1月1日、号数なし、17号]。

マトグロッソ州のパラグアイ国境地域にて日本人を含む探検隊が遭難したことを伝える記事では、救出隊によって救助された際の描写として「いずれもヒゲは伸び放題、栄養失調と病魔のためにやつれ果てた姿はさながら土人そのものであった」と先住民の容姿への否定的描写がなされている。その一方で、探検隊自身は探検先で「全然言葉の通じない土人に救われ」ており、外見への間接的な否定的描写と文明人を助ける存在としての肯定的描写が併記されている [日伯 1951年11月6日788号3面]。

他の属性でも確認した高橋による連載記事では、マトグロッソ州のボロロ族との出会いの一幕にて、「うす汚い容貌と理智に欠けた輝きのない瞳」と否定的描写をするも、「飾り気のない稚気に満ちた態度には、また愛すべき純情な、自然人の美しさも見逃すことは出来なかった」とその自然性について肯定的評価を行っている。 [日伯 1952年9月19日1020号4面]。

否定的描写の項でも取り上げたブラジル人探検家男性とマトグロッソ州の先住民女性との結婚に関する記事では、「衣類といったものは一糸たりとも身につけたがらないし、足はあらったためしなし」と原始性への否定的描写がなされるも、「この九月には愛の結晶が生れるんだそうだ」と、文明人との共生を示唆する描写が同時になされている [日伯 1953年5月30日1200号3面]。

肯定的否定的描写が併記された記事について、基本的には先住民の野蛮性が否定的に描かれているが、他方で自然性への賛美、また文明人との共生が示唆されている。

III-7 先住民と日本人の近縁性描写

描写内で先住民と日本人の近縁性について示唆したものは全体で15記事、新聞別では『パウリスタ新聞』が6記事、『日伯毎日新聞』が6記事、『バストス週報』が1記事、『サンパウロ新聞』が2記事となった。翁長によるマトグロッソ州での先住民調査について触れた記事では、調査先で先住民から「オセ (você[君、おまえ]) はどのツリーブ (tribo[部族]) から来たか」と聞かれ、「ハテ俺はどのツリーブだろうと鏡を見なおした」という。本記事からは、身体における近縁性の示唆、そして先住民側からの近縁性の発信が確認できる。また、翁長は「アグア (água[水]) のことをミズという」先住民集落の存在のうわさを聞き、「日本人とつながりがある」のではないかと調査隊から離れて単独行動を取っており、言語におけ

¹⁹ 泉は『日伯毎日新聞』でも同様の意見を提出しているが、その際には「インジオ」ではなく「カボクロ」を対象としている [日伯 1953年4月1日1165号3面]。

る近縁性についても描写がなされている [パウリスタ 1948年8月28日195号5面]。

先述の翁長がマトグロッソ州での調査を終えてサンパウロへ帰還したことを報じた記事のタイトルは調査地を「蛮地」としている。記事では翁長の調査結果について触れると共に、「三カ月の野外生活にすっかり赤黒く焼け、インヂオと間違えられたのも万更無理とはいえない容子だ」との意見が寄せられており、先住民との身体的な近縁性が示されている [パウリスタ 1948年8月31日196号3面]。

他の属性への検討でも舞台となった、パラナ州ロンドリーナ近郊のタクワラ河畔での釣りについて書かれた随筆の上編では、先住民が魚売りのために筆者の集落を訪問した際、「…我々日本人によく似た赤銅色をした顔…」とその身体的な近縁性が示されている [日伯 1949年11月29日258号4面]。

先に触れた随筆の後編では、同地の先住民女性の容貌について以下のように記述している。

五つ六つの女の子を抱く年配の者を除いては、未婚の女らしい羞いがみえる女で、どこか日本の南方の婦人によく似た貌形をしているのに驚く [日伯 1949年11月30日259号4面]。

日本の女性との身体的な近縁性を示唆したこの描写の他にも、本記事では「日本釜とブラジル釜の混血児」のようなものでとうもろこしを炒るといった調理法における近縁性が示され、また気性について「マンソ (manso[穏やか])」と肯定的に表現されている。

「ニュース・コント」と題された、パラナ州のチバデー河畔に住む先住民秘蔵の増毛薬についての記事では、「土人の酋長の娘と結婚した邦人」という小見出しで、「土人は他人種にはいくら娘ムコでも、ちん重しているものは知らせない習慣である」と、邦人には秘蔵の増毛薬の原料入手先を知ることができないと述べている [サンパウロ 1950年8月22日379号5面]。ここでは先住民と日本人の結婚による近縁性の示唆の一方で、他人種という近縁性を否定する描写も併記されている。

戦前のブラジルにおける排日論の理論的根拠となった社会学者オリヴェイラ・ヴィアンナ (Oliveira Viana) の死去を報じたニュースでは、ヴィアンナの主義主張に対して反駁したロケッテ=ピントの存在が紹介されている。

「伯国の原住民は蒙古系の土人じゃないか、その同じ蒙古系の日本移民を入れるのに何の不都合があるか」とロケッテ博士は華々しい論戦で日本人を擁護したものである [パウリスタ 1951年3月16日598号2面]。

本記事では先住民の東洋起源が示されると共に、「日本人と先住民の近縁性」言説が戦前のブラジル知識人層によって日本移民擁護の文脈で発信されたことを読者層へ再び示唆する内容となっている。

邦人芸術家としてブラジルの大手新聞で紹介された酒井エンブーの粘土細工に関する記事では、同氏が「…伯国先住の土人たちの伝説を図案化したものには日本と非常に近親性があり、このサシー (saci)²⁰ になぞらえる物として日本には「河童」がある」と語ったと伝えている [日伯 1952年2月17日861号3面]。本描写では、ブラジルの民間伝承のキャラクターであるサシーと日本の河童など、伝説における近縁性が指摘されている。

半田は、ペンネーム²¹を用いてブラジルの食文化についてのコラムを複数回寄稿している。「ブラジル人の生活や気持を理解し、さらにこの国に同化しつつあるわれわれの生活を反省する」ために執筆された本コラムでは、ブラジルの各地方における食文化の特徴を概観した後、日本移民の生活に一番近いと考えられるサンパウロ州の食文化について紹介している。先住民由来のとうもろこしやキャッサバの粉、黒人由来の「フェジョン (feijão[豆])」などと共に特徴的なものとして「カルネセッカ (carne seca[干し肉])」や

²⁰ ブラジルの民話に登場する、一本足で赤い頭布をかぶりパイプをくわえた黒人の少年のこと [現代ポルトガル語辞典 2003]。

²¹ 半田は「野口武二」という筆名を戦前より用いている [田中 2013:171]。

「バカリャオ (bacalhau[干し鱈])」を挙げた後、干し肉の別名である「シャルケ[charque]」について以下のように説明している。

因みにシャルケとはペルー土人の語から転訛したものである。ブラジルの土人は獣肉や魚類を火にあぶったモケアーダ (moqueada) (モケン) を食糧として保存していた。一寸日本のいろりばたの光景を連想させられる [パウリスタ 1952年3月26日 875号4面]。

本コラムでは、日本移民がブラジルへとさらに馴染むために必要な知識として代表的な食文化が紹介されたが、その中で先住民による保存食の調理法について日本との近縁性が示唆されている。

既にいくつかの属性にて検討している高橋の連載記事「ブラジル先住民インジオの生態」の第1回目には、一般的に否定的要素の多い先住民について、過去のブラジル先住民研究者たちがいずれも「地球上の人間の中でも最も清純であり、性、自然にして、正しきもの」として評価していたことを伝えている。また、マトグロッソ州のボロロ族の教化に従事した神父による先住民の学習能力への評価に触れた後に、日本移民の近年における活躍の場と各地の先住民について以下のように述べている。

とまれ、最近邦人が西に東に、北はアマゾンから南は南大州に至る諸州を所狭しとばかりに活躍している態は、まさに往時のバンデランテスの感を想わせるではないか。特に、アマゾンまたは、マトグロッソ州の奥深く突入し、山野を開拓せんとする人達にとって、その土地の主人公であるトピー族 (Os Tupís) グアイクルース族 (Os Guaicurus) カラジャ族 (Os Carajás) ボロロ族 (²²Bororós) シャバンテ族 (Os Chavantes) 其他数々のブラジル先住民の生活、信仰、習慣、言語の一端を知ることは決して無意義なことではないと思われる。尚、ブラジル・インジオの容貌、骨格等がより多く東洋人に似通っており、太古、アジアから渡来せるものであるとする学者間の一説に多大の興味を持つものであるがここでは単なる皮相の推察や批評はさけ、出来るだけ平易にブラジル先住民の生活其他について書いて見ることにしよう [パウリスタ 1952年7月2日 950号4面]

本描写では、日本移民がこれから特に活躍するであろう地域として、記事発表の前年である1951年に辻小太郎²³とヴァルガス大統領との間で日本移民導入が許可されたアマゾン地域、また記事発表と同月に松原安太郎²⁴とヴァルガス大統領との間で日本移民導入が許可されたマトグロッソ州が挙げられており [サンパウロ人文科学研究所編 1996:112-114]、同地の主人である先住民の生活、信仰、習慣、言語を知ること、これから入植するであろう日本移民にとって有意義であるとしている。さらに、先住民と東洋人との身体的近縁性、また先住民の東洋起源を示唆する学説への関心が語られている。本記事からは、先住民への否定的イメージに対する専門的見地からの否定による肯定的イメージの増幅、また当時日本移民にとって大きな話題であった戦後移住再開と深く関連する地域における先住民関連知識の有用性と、先住民の東洋起源と身体における近縁性との関連が示唆されている²⁵。

²² 原文では前の括弧が欠けているが、筆者により加筆した。また、本引用文中の各部族名の綴りは引用文のまま記述している。

²³ 1903年生まれ、滋賀県彦根市出身。1928年にブラジルへ渡り、アマゾン視察した。1930年に帰国後、国士館高等拓殖学校教授として移住民教育に従事した。1933年にはアマゾン産業株式会社現地支配人となり、アマゾン流域でのジュート移植を試みた [パウリスタ新聞社編 1996:159]。

²⁴ 1892年生まれ、和歌山県日高郡出身。第一次世界大戦で日独戦に参加後、1918年にブラジルへ移民、その後サンパウロ州マリリアにて大農場を経営した [パウリスタ新聞社編 1996:228-229]。

²⁵ 神屋は自著の中でマトグロッソ州のカッペン移住地を例に挙げて同様の示唆をしている。同書によれば、1952年7月に先発隊が同地へ調査に入った際、同地の先住民について事前にその生態などの研究がなされたという。神屋はブラジルの先住民について「南方から日本へ渡って来た種族とも血のつながりがあったかも知れませんが」と日本人との近縁性をほのめかすと共に、先住民側も日本人を同郷として捉えており、ブラジル南部のドイツ系移民が度々先住民の襲撃を受けたのに対して日本移民は先住民から危害を加えられたことがないと説明している [神屋 1957:185-201]。

日本の銀座にある東洋美術館主で東洋美術協会理事長の渡辺充枝によるマトグロッソ州やゴイアス州への視察旅行で、ゴイアス州内のマトグロッソ州境近くにある先住民集落を訪問した際の記事では、その性格を温和とし、皮膚の色における日本人との身体的近縁性を示した上で「邦人に酷似」という小見出しにて以下のように述べている。

それに眼と耳が鋭く、私などが見えないもの、また聞えぬ音なおも遠くからすぐ感付くのは驚きました、インジオの子供たちは甘いものが好きで私がゴヤニアから持っていったバーラ (bala[飴]) を欲しがるので、部落の前の川で皆を集め競泳をさせて勝ったものにやりました、男女交際はとくにやかましく他人の女をとると制裁を受けるとのことです。ここでは日本の許嫁制度があつて子供が生まれぬ先から、大きくなったらあそこで女の子が生れたらこちらで生れる男の子のお嫁さんになるという風にすでに定められてるわけです、名前には男にイロハ、女にはキミヨなどというのがあつて日本人に大へん似ています。部落の酋長も白人よりも黄色い東洋人に親しみを覚えるといつてました [日伯 1952年10月19日1046号3面]。

本小見出しでは、婚姻制度、言語(名前)における近縁性が紹介されると共に、先住民側の東洋人への親しみが示唆されている。

マトグロッソ州カンボグランデにて「ブーグレ (bugre) 族」²⁶集落に住む一家についての記事では、猛獣狩りにおける先住民たちとの協業が以下のように描写されている。

面白いのはオンサ (onça[ジャガー]) 狩で雨模様の日を選んでオンサの出そうな密林の近くに「射場」を作り三人の息子さんたちと一緒に銃をかまえて待ち受け、三十人から五十人のブーグレ達が手に手に爆竹を持って追い立ててくるのを射止めるわけで、鹿などこの方法で一回に六頭も仕とめたことがあるという [日伯 1952年11月5日1059号3面]。

本記事のタイトルには「探検映画を地でゆく蛮族の中の邦人一家」とあるように、先住民の野蛮性を指摘しつつも、記事内では日本人との共同生活が描かれている。

マトグロッソ州カンボグランデから百数十キロほど離れた山岳地帯の先住民集落への訪問記事では、同集落の酋長が語る伝説として、東洋のある国から太平洋を漂流して南米へ到着、アンデス山脈やアマゾン河を經由して先住民はブラジルの地へやって来たとの紹介があり、先住民の東洋起源が示唆されている。取材した記者は、先住民にとって「盆と正月を一度に迎えたような祭典日」の二日間を「祖国を同じうする？」先住民と一緒に過ごしたと記載している。その気性について非常に穏やかであると肯定的な描写をすると共に、先住民側から「ノッソ・サンゲ・エ・メズモ (nosso sangue é mesmo[我々の血は同じだ])」と「まるで息子でも迎えるような」歓待を受けたと、血統における近縁性の示唆そして先住民側からの近縁性の発信について触れている。記者は先住民の祭りを以下のように描写している。

文字通り「熱風」の吹きつける炎熱の広場には、若い半裸のブーグレ達が全身汗みどろになって東洋舞踊??を踊っている。訳のわからぬ奇声を発しながら幾重もの輪になって踊り狂い、弓矢を持った幾組もの男がその円陣のなかで「剣舞」のような舞をまう。似ている!!! まったく日本人にそっくり、顔といい体軀といい言葉のアクセントまで東洋的で、ホントに我等が先祖の生態を見せられているような感じだ [日伯 1953年3月6日1145号3面]。

²⁶ 「先住民」「粗野な人」を意味する語であり、特定の部族名を指してはいない。同時代の同紙記事では「ブーグレ」を「純粋にブラジルの先住民といわれる種族」と説明している [日伯 1953年3月6日1145号3面]。

本描写では、芸能（舞踊、剣舞）、身体、言語における近縁性が強調されている。また、先住民の主食についての説明でも「ミーリョ（milho[とうもろこし]）粉の『焼物』や「マンジョカ（mandioca[キャッサバ]）の『油あげ』と調理法における日本との近縁性が示唆されている。

日本人戦後移住が本格的に再開された 1953 年における、日本移民にとって重要な記念日であった天長節を祝う『サンパウロ新聞』の特別号の中で、一面に渡って掲載された「ブラジルの土人 何処から移住して来たか？」と題した記事については、拙稿 [2022:35-36] にて香山論への間接的言及を行ったものとして既に論じている。記事内では香山も『ツピ単語集』にて引用していた諸学者による見解や鳥居によるブラジル先住民土器と日本の先住民土器との近縁性の指摘などを踏まえ、先住民の東洋起源とポリネシア経由での南米への到来が有力な説であることを確認した後、「日本人との人種的關係」の小見出しで以下の描写を行っている。

ブラジル土人はその容ぼうが日本とよく似ているので太古に日本から移住して来たものだろうとの説をなすものもある、中にはブラジル土語と日本語の類似した言葉をたんねんに拾い集めて同祖説を立証しようとした学者もあった。しかし、ブラジル土人と日本人とが血液的に直せつのあるなどということは政治的に利用される以外には価値のないことである、けれどもブラジル土人がポリネシア系統のものであるとすれば、ポリネシア族とせっ近していたインドネシア族が日本民族の血液の中に相当の割合で入り込んでいる以上、血液的にも文化的にも、全然無関係であるとはいえない…これで、ブラジル土人と日本民族との関係が、どの程度のものであるかが分かるがこのことはペルーのインカ民族についても同様である [サンパウロ 1953 年 4 月 29 日 740 号 17 面]。

本記事では、先住民と日本人について、その身体的、血統、文化的な関係性は無関係ではないとしつつ、香山論を彷彿とさせる両言語の近縁性を含めた「先住民と日本人の近縁性」言説について政治的言説であることを批判的に指摘している。さらに、ブラジル先住民との関係と同等としてペルーの「インカ民族」について触れている。

斎藤は「皮膚の色」と題した記事で、北方の諸州やマトグロッソ州辺りでよく見かける「黒人と土人との混血児」カフーズ（cafuzo）には日本人との身体的な近縁性がみられるが、黒人の特徴も肌や顔の造形に出ていると指摘している。またブラジルの国勢調査の人種型 4 種（白人、黒人、褐色人、黄色人）について、「日本人の例を取っても、われわれの同胞子弟はみな黄色に分類される筈だし、支那人や或いは土人も我々黄色の仲間入りをするから…」と、統計上の分類概念レベルでの先住民と日本人の近縁性が示唆されている [パウリスタ 1953 年 6 月 24 日 1206 号 4 面]。

サンパウロ州バストスにて発行された『バストス週報』の「バストス開植二十五周年記念号第三集」に掲載された、日本人戦後移住の入植先であるマトグロッソ州ドウラードスの訪問記では、同地がブラジル中から注目される有望な地であることを説明した後、「私達の後続部隊日本移民が松原構想によりブラジル政府に受入れられ五十六家族が入植するのである」と日本から同地への戦後移住の経緯について触れている。続いて、世界連邦政府樹立運動²⁷の思想を元に、日本人の入植がキスト（quistof[集団中の異分子]）を形成するという懸念を否定している。さらに、寄稿者の居住地であるバストスの現在と照らし合わせて、ドウラードスでも日本移民は良きブラジル人となるであろうと予想した上で、同地における先住民について以下のように触れている。

又此のドラードの町にはブラジルの先住民族ブグレの混血児やブグレが生活して居る、子供なんか一寸見ると日系人かと思われる、町で香具師（ヤシ）に見とれて居る私をブグレの婆様が親しそうに何

²⁷ 世界政府運動宣伝のために各国を行脚する中で 1951 年にブラジルを訪れ、日本人戦後移住再開に向けてブラジル政府への交渉を行った中村嘉壽代議士の影響と考えられる [パウリスタ 1951 年 8 月 1 日 694 号 3 面]。中村の来歴と移民との関係については伊東 [2018:34-35] を参照のこと。

か話しかけて来て何とか言って去っていったが実に先祖の国へ来たような温い感じを受ける町である [バストス 1953年6月29日170号4面]。

本記事では、日本人戦後移住先であるドウラードスの先住民と日系人との身体的な近縁性、また先住民側からの近縁性の示唆がみられる。さらに、先住民と日本人の祖先を重ねた上で同地を肯定的に描写しており、先住民との近縁性が日本人戦後移住の肯定的要素として機能していることがわかる。

以上、先住民との近縁性を示す各記事へ分析を行った。近縁性の内容（1記事内に複数要素あり）については、身体に関するものが10、東洋起源、言語がそれぞれ4、調理法、先住民側からの近縁性の示唆がそれぞれ3、ブラジル人種民主主義との関連、戦後移住との関連、共同生活、血統、芸能がそれぞれ2、伝説、婚姻制度、国勢調査上の分類、文化がそれぞれ1であった。また、インカ帝国との関連性を示すものや近縁性を否定する他人種という要素もそれぞれ1つあった。これらの分析結果から、先住民との近縁性に関する記事では、身体的特徴をはじめとしたさまざまな類似を単に示したのから、先住民の東洋起源、そして戦前ブラジル知識人層を源とするブラジル人種民主主義との関連の再示唆、さらには当時の日系コロニアで大きな話題となっていた日本人戦後移住と関連して、新移住地との相性を先住民との近縁性に求める描写を確認することができた²⁸。

IV 先住民関連記事の時代別・属性別・地域別分布

先に検討した先住民関連記事に、拙稿 [長尾 2022] で既に検討した香山論関連記事を合わせると、合計67記事となる。これらの記事における各属性の割合を図で示すと以下ようになる。

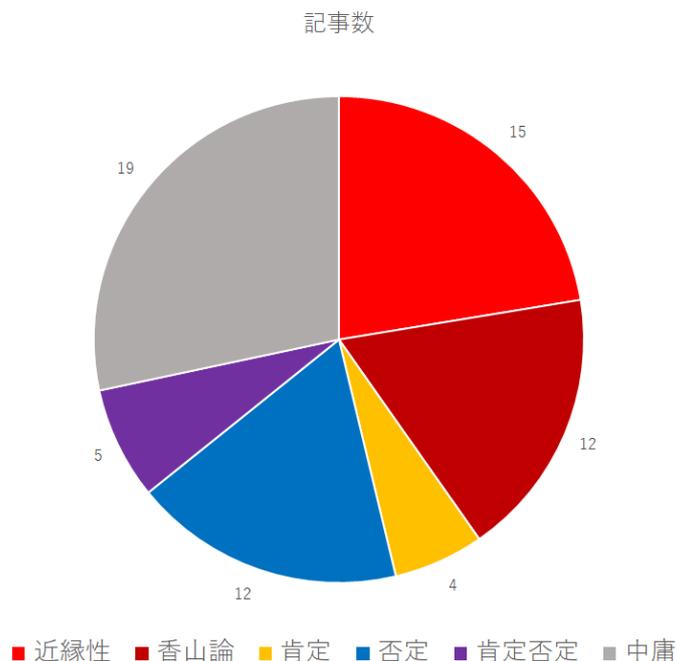


図1 各属性の割合（筆者作成）

²⁸ 移住地との相性を先住民との近縁性に求めた日本側の事例として、戦前のアマゾン移民における福原八郎の言が挙げられる [Lesser 2006[2002]:86-87; 2016[1999]:164-166]。また、香山の『ツピ単語集』の日本での印刷の際の寄贈対象者であった言語学者の新村出は、日本人戦後移住を話題とした邦字新聞への寄稿の中で、同書が渡航者にとって有用であると述べていたことを拙稿にて確認している [サンパウロ 1953年6月13日757号3面; 長尾 2022:34]。

図1では、全記事における各属性の占める割合を円グラフで表示している。総数67記事のうち、「先住民と日本人の近縁性」は15記事、「香山論」は12記事、「肯定的」は4記事、「否定的」は12記事、「肯定的否定的」は5記事、「中庸」は19記事となっている。香山論を含めた近縁性関連の記事が全体の約4割を占めており、当時の負け組側を主とした言説空間において、先住民への関心の多くが日本人との近縁性に向いていたことを示している。グラフの約3割は中庸であるが、その中には先住民研究に関する記事が多数みられた。戦前における考古学及び先住民研究への日本移民の関心、また日本移民の先住民研究家による調査旅行記の連載などを踏まえると、これらは当時の日系コロニアにおける先住民への関心の高さを示しているといえよう。近縁性関連及び中庸を除くと、否定的描写が先行し、肯定的否定的、肯定的と続いているが、先住民の原始性や日本移民への悪影響が示唆される一方で、その自然性や平和さが評価されている。

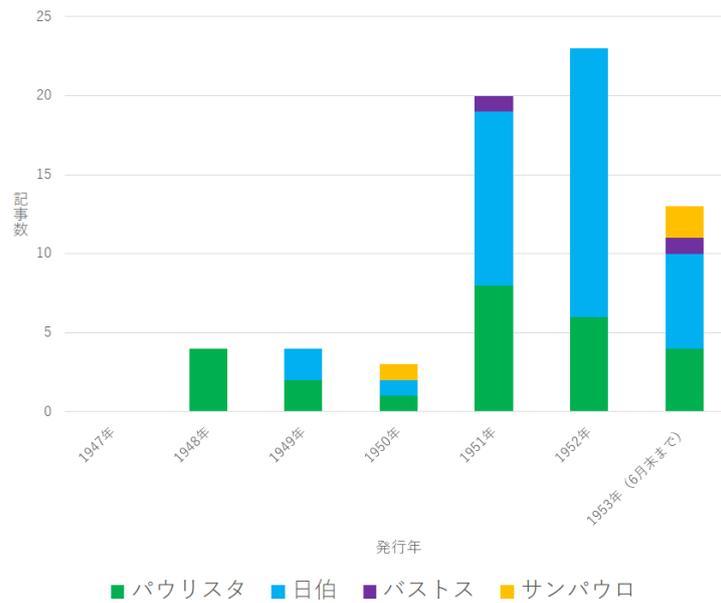


図2 時代別記事数 (筆者作成)

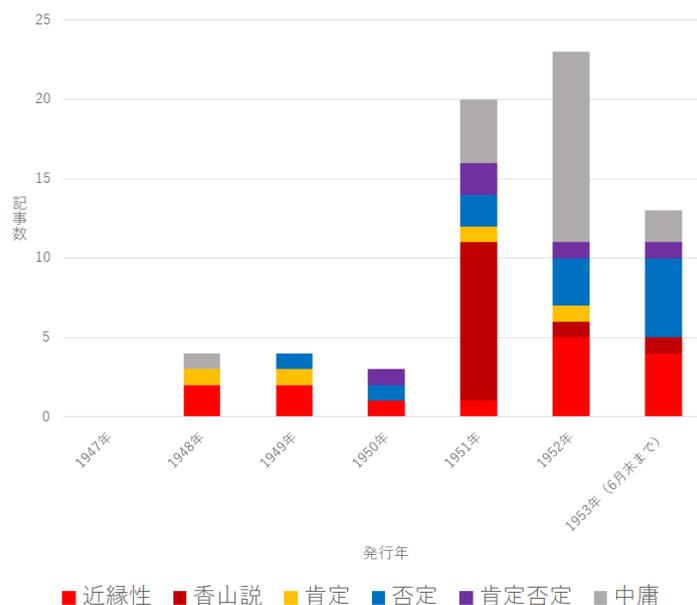


図3 時代別属性数 (筆者作成)

図2をみると、時代別記事数について、香山論が提唱された1951年を境に先住民関連記事が増加していることがわかる。1953年については6月末までの半年間が調査対象であるが、前年の1952年と同様のペースで先住民関連の記事が掲載されていたことが読み取れる。新聞別にみると、『日伯毎日新聞』による記事が最も多く、次に『パウリスタ新聞』が続いている。『バストス週報』と『サンパウロ新聞』では多くの記事はみられなかったが、共に本論において重要な先住民描写が確認された。

図3をみると、先住民関連記事の増加がみられた1951年では全記事のほぼ半数が香山論関連であったが、翌1952年にはほとんどの記事が香山論以外による発信となっている。1953年の前半期についても香山論以外からの記事が多数を占めるが、そのうちの一部では直接、または間接的に香山論を意識したものが見受けられた[長尾 2022]。先住民との近縁性についても、1951年はほとんどが香山論関連記事であるが、1952年そして1953年の前半期には香山論以外による一定数の記事がみられる。この図から、香山論の発信と日本移民の先住民への注目との関連、香山論の日系コロニアへの一定の影響と香山論以外による先住民と日本人の近縁性への関心について示唆できよう。

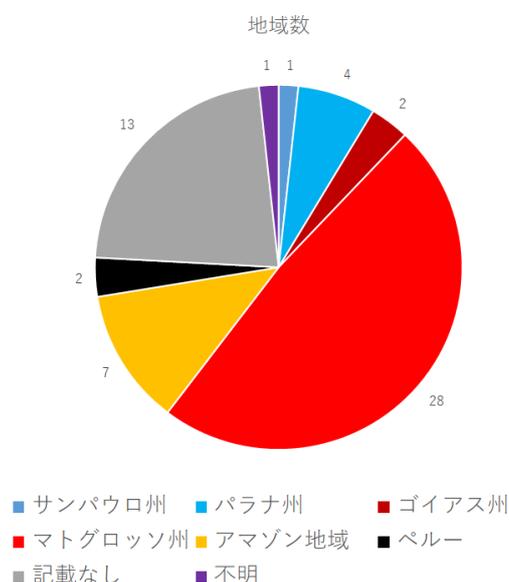


図4 先住民関連記事の対象地域分布 (筆者作成)

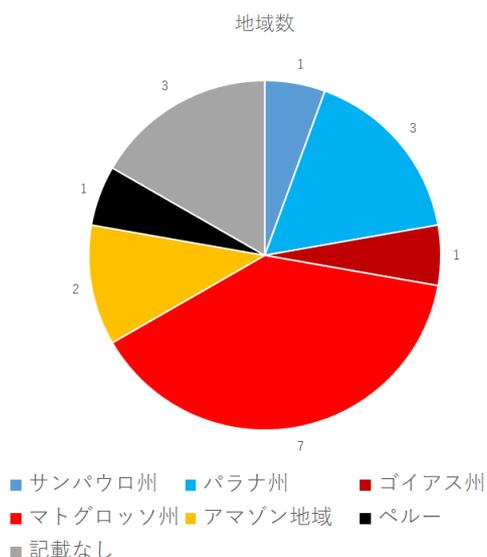


図5 「先住民と日本人の近縁性」記事の対象地域分布 (筆者作成)

図4は本論にて分析を行った計55の先住民関連記事の対象地域²⁹を円グラフで示したものである。基本的には州単位で示しているが、州名の記載がなくアマゾン地域を対象とした記事についてはパラ州やアマゾナス州に関する記事と合わせて「アマゾン地域」とした。記事内に複数の対象地域が示唆されたものを含めると、地域の総数は計58となる。図をみると、戦前より日本移民が多数入植していたサンパウロ州とパラナ州³⁰を合わせても全体の1割未満であるのに対して、日本人戦後移住の候補地であるマトグロッソ州とその隣接地域のゴイアス州で全体の5割強、アマゾン地域を含めると全体の6割5分以上を占めていることがわかる。また、図5は先住民と日本人の近縁性に触れた計15記事（地域の総数は18）の対象地域を円グラフで示したものであるが、こちらでもサンパウロ州とパラナ州は合わせて2割強であるのに対して、マトグロッソ州とゴイアス州で全体の4割5分未満、アマゾン地域を含めると全体の5割5分強を占めている。1960年のブラジル国勢調査における先住民関連データについて分析したクラウディオ・サンティアゴ・ディアス・ジュニオール（Claudio Santiago Dias Júnior）とアナ・パウラ・ヴェローナ（Ana Paula Verona）は、パラ州やアマゾナス州などの北部諸州を含む11州のデータが散逸していることを指摘した上で、北部以外の地域別先住民人口の割合について、北東部が13%、サンパウロ州を含む南東部が5.4%、パラナ州を含む南部が33.5%、そしてゴイアス州やマトグロッソ州を含む中西部が48.2%としている[Dias Júnior e Verona 2018:4-6]。本論にて扱った各先住民記事の対象地域の割合について、マトグロッソ州を含む中西部に関しては先住民人口分布の割合とほぼ比例している一方で、サンパウロ州を含む南東部そしてパラナ州を含む南部に関しては先住民人口分布の割合より低い数値となっている。以上から、本論の分析対象となった当時の邦字新聞上では、戦前より日本移民の中心的な活動地域であったサンパウロ州やパラナ州よりも、日本人戦後移住の候補地であったマトグロッソ州やその周辺先住民への関心が大きかったことがうかがえよう。

V 結論

本論では、戦後のブラジル日系コロニア、特に負け組側言説空間を中心に、その先住民描写について「先住民と日本人の近縁性」を含めた諸属性への分析を行った。その結果、戦前から続く、日系コロニアにおける先住民への一定の関心、そして拙稿[長尾 2022]で分析を行った香山論関連と合わせて、その関心の多くが先住民と日本人との近縁性に向いていたことが確認された。また、本論の分析対象となった先住民関連記事の対象地域分布から、日本人戦後移住候補地の先住民への関心が高いことも明らかとなった。さらに、香山論への間接的批判的反応、香山論以外による戦前ブラジル知識人層を源とした「先住民と日本人の近縁性」言説の再示唆が確認され、また香山論の発信と香山論以外による近縁性関連記事の増加との関連が示唆された。最後に、先住民との近縁性が日本人戦後移住における肯定的要素として機能した事例も確認された。

今後の課題としては、本論で十分に検討ができなかった勝ち組側言説空間における先住民描写の分析が挙げられる。本論では勝ち組側の読者層をも取り込んだ『サンパウロ新聞』を分析対象としたが、当時の日系コロニアには複数の勝ち組系新聞が発行されていた。既にある程度のまとまった所蔵が確認されている『伯刺西爾時報』等の勝ち組側言説空間への検討を通して、日系コロニア全体における同言説の存在とその機能について確認していきたい。

²⁹ ここでは、記事内で扱われた先住民の居住地域のことを指す。例えば、サンパウロ市内においてマトグロッソ州の先住民に関する講演会が行われた場合、対象地域はマトグロッソ州となる。

³⁰ 戦前から1950年頃までにかけてのパラナ州における日本移民の動向については矢持[1998]を参照のこと。

参考文献

- ブラジル・インディオ文化研究同好会、1939、『ブラジル、サンパウロ州内の考古學的調査』、東京人類學會。DOI: <https://doi.org/10.11501/3441065>
- Cunha, Ayres Câmara, 1976, *A história da índia Diacuí : Seu casamento e sua morte*, Clube do Livro, São Paulo.
- Dias Júnior, Claudio Santiago, Ana Paula Verona, 2018, Os indígenas nos Censos Demográficos brasileiros pré-1991. *Revista Brasileira de Estudos de População*, 35(3): 1-9. DOI: <https://doi.org/10.20947/S0102-3098a0058>
- 深沢正雪、2010、「第2章 日系メディア史 第2節 戦後編」、『ブラジル日本移民百年史 第三巻 生活と文化編 (1)』、ブラジル日本移民百周年記念協会日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編、pp.117-143、風響社。
- 古杉征己、2021、『アンドウ・ゼンパチ：日系社会のオピニオン・リーダー』、サンパウロ人文科学研究所。
- 半田知雄、1949、「第四章 コロニア文學・美術 一、初期文學史概略」、『移民四十年史』、pp.322-328、香山六郎。
- 半田知雄、1970、『移民の生活の歴史：ブラジル日系人の歩んだ道』、家の光協会。
- 橋本順光、2015、「山田長政の秘宝譚：『日東の冒険王』からオーストラリアの伝説まで」、『日本研究』、12:99-131、チュラーロンコーン大学文学部日本語講座。
- 橋本順光、2019、「東洋人アメリカ発見説とその転生：日本の写しとしてのインカ帝国幻想」、『映しと移ろい：文化伝播の器と蝕変の実相』、稲賀繁美編、pp. 349-373、花鳥社。
- Hayashi Bruno Naomassa, 2022, *Metamorfoses do amarelo: a imigração japonesa do "perigo amarelo" à "democracia racial"*. *Revista Brasileira de Ciências Sociais*, 37(108): 1-18. DOI: <https://doi.org/10.1590/3710809/2022>
- 細川周平、2008、『遠きにありてつくるもの：日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』 みすず書房。
- 池上岑夫他編、1996、『現代ポルトガル語辞典』、白水社。
- 伊藤秋仁、2010、「ブラジルにおける人種意識の変遷：人種民主主義から人種主義へ」、『京都ラテンアメリカ研究所紀要』、10:43-61。
- 伊東かおり、2018、「戦間期の列国議会同盟と日本：中村嘉寿の活動を中心に」、『国際政治』、193:29-43。DOI: https://doi.org/10.11375/kokusaiseiji.192_29
- 神屋信一、1957、『百姓の書いたブラジル動物記』、文芸春秋新社。DOI: <https://doi.org/10.11501/1376412>
- 国際日本文化研究センターHP、「バストス週報 解説」、<https://rakusai.nichibun.ac.jp/hoji/top.php?title=BastosShuho> (最終閲覧日：2022年10月11日)。
- 香山六郎、1951、『ツビ単語集：日・葡両国語対訳付』、大日本印刷株式会社。
- 久保平亮、2022、「戦前期ブラジル邦字新聞にみる邦訳ブラジル文学の系譜」、連載レポート 98、一般社団法人ラテンアメリカ協会 HP、<https://latin-america.jp/archives/53818> (最終閲覧日：2022年10月26日)。
- Lesser, Jeffery, 2016[1999], *Negotiating National Identity: Immigrants, Minorities and the Struggle for Ethnicity in Brazil*, Duke University Press, Durham. (ジェフリー・レッサー、2016、『ブラジルのアジア・中東系移民と国民性の模索：「ブラジル人らしさ」をめぐる葛藤と模索』、鈴木茂・佐々木剛二訳、明石書店)
- Lesser, Jeffery, 2006[2002], *In Search of the Hyphen: Nikkei and the Struggle over Brazilian National Identity. New Worlds, New Lives: Globalization and People of Japanese Descent in the Americas and from Latin America in Japan*, edited by Lane Ryo Hirabayashi, Akemi Kikumura, and James A. Hirabayashi, pp.37-58, Stanford University Press, Stanford. (ジェフリー・レッサー、2006、「ハイフンを探して：ブラジル国民としてのアイデンティティをめぐる苦闘と日系人」『日系人とグローバリゼーション』、レイン・リョウ・ヒラバヤシ、アケミ・キクムラ＝ヤノ、ジェイムズ・A・ヒラバヤシ編、小澤智子訳、pp.81-111、人文書院)
- Lobo, Bruno, 1926, *Japonezes no Japão - No Brasil*, Imprensa nacional, Rio de Janeiro.
- 前山隆、2002、「一九二〇年代ブラジル知識人のアジア人種観：日本人観を中心に」、『ラテンアメリカの日系人 国家とエスニシティ』、柳田利夫編、pp.1-40、慶應義塾大学出版会。
- 物部ひろみ、2010、「戦間期ハワイにおける多民族性と日系人の『位置』：先住ハワイ人との関係をめぐる

- 一考察』、『立命館言語文化研究』、21(4): 163-173。DOI: <https://doi.org/10.34382/00002559>
- 森幸一、2003、「ブラジル日系人の「日本語」を巡る状況と言説：1908年から1941年まで」、『言語の接触と混交：日系ブラジル人の言語の諸相』、工藤真由美編、pp.88-104、大阪大学21世紀COEプログラムインターフェイスの人文学。
- 長嶺由吉、1990、「カップペン入植地を変更するまでの経緯について」、『沖縄県人ブラジル移住80周年・在伯沖縄県人会創立50周年記念誌』、山城勇編、231-234、在伯沖縄県人会。
- 長尾直洋、2019、「人文研前史：サンパウロ人文科学研究所の成立をめぐる史的考察」、『人文研』8: 5-50、サンパウロ人文科学研究所。
- 長尾直洋、2022、「香山六郎による日本語・ツピ語同祖論の社会的影響に関する一考察：ブラジルにおける日本語新聞を中心に」、『名桜大学紀要』、27: 29-41。
- 日本移民80年史編纂委員会編、1991、『ブラジル日本移民八十年史』移民80年祭委員会、ブラジル日本文化協会。
- 野村康、2017、『社会科学の考え方：認識論、リサーチ・デザイン、手法』、名古屋大学出版会。
- パウリスタ新聞社編、1996、『日本・ブラジル交流人名事典』、五月書房。
- Roquette-Pinto, Edgard, 1933, *Ensaio de antropologia brasileira*, Companhia Editora Nacional, São Paulo.
- 酒井喜重、1979、『ブラジル・サンパウロ州考古誌』、六興出版。
- サンパウロ人文科学研究所編、1996、『ブラジル日本移民・日系社会史年表：半田知雄編著改訂増補版』サンパウロ人文科学研究所。
- 鈴木讓、2006、「言説分析と実証主義」、『言説分析の可能性』、佐藤俊樹・友枝敏雄編、pp.205-232、東信堂。
- Takeuchi, Marcia Yumi, 2009, *Entre gueixas e samurais: a imigração japonesa nas revistas ilustradas (1897-1945)*. Tese de Doutorado, USP, São Paulo. DOI: <https://doi.org/10.11606/T.8.2009.tde-04022010-132805>
- 田中慎二、2013、『移民画家半田知雄 その生涯』、サンパウロ人文科学研究所。
- 脇坂勝則、1998、「移民・コロニア・日系人」、『人文研』、1: 66、サンパウロ人文科学研究所。
- 矢持義和、1998、「日本人によるブラジル・パラナ州北部地方への人口移動の背景：主にコーヒーによる地域開発史から」、『天理大学学報』、50(1): 75-94。

参照邦字新聞記事の所在

バストス自治会

『バストス週報』（国際日本文化研究センターHP「海外邦字新聞データベース」所収）。

伯刺西爾時報社

『伯刺西爾時報』（国際日本文化研究センターHP「海外邦字新聞データベース」所収）。

日伯毎日新聞社

『日伯毎日新聞』（サンパウロ日本移民史料館所蔵マイクロフィルム）。

日伯新聞社

『日伯新聞』（国際日本文化研究センターHP「海外邦字新聞データベース」所収）。

パウリスタ新聞社

『パウリスタ新聞』（ニッケイ新聞社所蔵）。

サンパウロ新聞社

『サンパウロ新聞』（サンパウロ新聞社所蔵）。

聖州新報社

『聖州新報』（国際日本文化研究センターHP「海外邦字新聞データベース」所収）。

採択決定日：2022年11月16日

掲載日：2022年12月20日

Article

A Study on the Discourse of "Kinship between Indigenous Peoples and Japanese" Concerning Japanese Immigrants in Brazil:

Focusing on Articles from Brazilian Japanese-language Newspapers after World War II

Naohiro NAGAO

MEIO UNIVERSITY

key words : Brazilian Japanese Immigration History, Kachigumi/Makegumi Conflict, Rokuro Koyama, Ethnic Media, Brazilian Racial Democracy

This study focused on the discourse of the "kinship between indigenous peoples and Japanese" as a form of adaptation of Brazilian Japanese immigrants to Brazil after World War II, and discussed its transmission and reception, signification, and function in the Nikkei community. Rokuro Koyama, a Japanese immigrant intellectual, attempted to approach the national model of Brazilian racial democracy with a mixture of whites, blacks, and indigenous peoples with Japanese immigrants. Koyama tried to do so by advocating the "Tupi-Japanese syncretic theory" through the publication of "The Tupi-Japanese Word Book" and related reports in Japanese-language newspapers in 1951, when the aftermath of the conflict between Kachigumi/Makegumi was still fresh. To reexamine the social influence of this discourse in the Nikkei community, this study examined the presence of this discourse, including Koyama's theory, using as its primary source Japanese-language newspapers which were considered the main discursive space for Brazilian Japanese immigrants at the time, especially those on the Makegumi side. Specifically, we extracted depictions of indigenous peoples, including the same discourse, from articles in various Japanese-language newspapers between 1947 and 1953, classified them by attribute (unattributed, positive, negative, positive-negative, and proximity between indigenous peoples and Japanese), and then analyzed each attribute to depictions of indigenous peoples. The analysis revealed a certain degree of interest among the Nikkei community of the time in indigenous peoples, including those who were unattributed, and that, overall, negative attributes outweighed positive ones. Still, there were several indications of proximity to the Japanese, including those not directly related to Koyama's theory, some of which had a similar function, as well as those that showed a link to postwar emigration from Japan to Brazil, which was a major concern of the Nikkei community in the early 1950s.